Dark In Light

容疑者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄａｒｋ　Ｉｎ　Ｌｉｇｈｔ

【Ｎコード】
Ｎ８５１３Ｈ

【作者名】
容疑者

【あらすじ】
アーメア暦５７６年世の中は腐っていた。貴族だけが良いは思いをし、平民だけが苦しんでいた。中には良い貴族もいた。そんな時一つの組織立ち上がった。「僅かな光」。悪い貴族を懲らしめるための組織だった。その「僅かな光」の一人、トュレイマン。そんな彼はどんな生き方をするのか？

第一話「俺の仕事」

大きいドアの前に立つ兵士。
「なんだお前は！？」
と叫ぶのは鎧を着た兵士。体格はあり強そうだ。
兵士は槍を構える。

「あら、ばれちゃたよ。」
挑発のような声で困った顔している少年。
青年は魔女のような帽子を被り、帽子から紅い髪が少し見えている。
黒い服を着て、黒いズボンを履いている。
腰には剣を持っている。

「侵入者だ！！！」
と兵士が大きい声を上げる。

「そりゃないぜ。」
少年がそう言うと兵士に向かって走り出した。
その瞬間ズサッと鈍い音が聞こえる。

「ぐはっ。」
と兵士が悲鳴をあげる。

兵士の後ろには青年がいた。
そして、兵士の胸には剣が刺さっていた。青年の。
何が起きたかというと青年が走り出しと共に剣で兵士を一瞬で刺したのだ。
かなりの速さである。

「何・・・者・・・・・だ？」
兵士にが苦しげに少年に聞く。

「暇だし答えるか。俺の名前はトュレイマン。
義賊、「僅かな光」の一人だ。」
青年ではなく、トュレイマンが軽く紹介する。

「そ・・・・う・・か。」
兵士が苦しげに言うと兵士は力尽きたかのように倒れた。

「死んだか・・・」
トュレイマンが悲しげに言う。
トュレイマンは兵士が守っていた扉を開ける。

トュレイマンはドアの向こうを見て

「遅かったか・・・」
とトュレイマンが言う。

トュレイマンが見ている部屋は至って普通。
大きな窓が一つあり、ベットが一つある。
ベットの近くの机に花瓶が置いてある。
しかしそのベットの上が普通ではなかった。
人が二人、死んでいるのだ。両方とも腹にナイフが刺さっていたのだ。
片方は優しそうな顔したおじさん。
高貴な服を着ている。
もう片方は優しそうな顔したおばさん。
ドレスを着ている。
トュレイマンはおじさんとおばさんの脈を触ると

「くそっ。」
と言うと壁に拳にぶつける。

「それとそこで何してるの？お姫さん？」
とトゥレイマンがふざけた様に言うとトュレイマンが入ってきた扉が少し動いた。

「あっ。」
女が入ってきた。

女はトュレイマンより背が少し低く、赤色の髪をしており
その髪にヘアバンドを付けている。
女は部屋のベットを見ると驚いた顔をして、その後に悲しい顔を浮かべる。

「許しません！」
と女が言うと女が花瓶を持って

「うわっあぶねぇ！」
トュレイマンを殴ろうとしてきた。
トュレイマンは辛うじて避けた。
女はもう一度、花瓶でトュレイマンを殴ろうとしてきた。
花瓶を避け

「言っとくがこの人たちを殺したの俺じゃないぜ。」
トュレイマンがそう言うと

「えっ。」
女は花瓶を置いた。

「本当ですか？」
「本当だ。信じろって言っても無理かもしんねぇけど。」
女が聞くと、トュレイマンが答える。

「それで、あんた誰だ？」
「私ですか？私は。」

第一話「俺の仕事」（後書き）

新連載です。
人物紹介をします。
トュレイマン・ゼラース
性別・男
２３歳
身長１７０ｃｍ
僅かな光の一人。自分の自由の為に僅かな光に入った。
まだ僅かな光に入って間もない。
どんな事にも動じない性格。怒ることは滅多にない。
好きなものは自由、嫌いなものは不自由。

第二話「城と言う名の仕事場からの脱出」

「私ですか？私はティシア・メルスと言います。今、ベットに倒れている方の娘です。
あなたのお名前は何ですか？」
「俺か？俺はトュレイマン・ゼラース。仕事でここに来ているんだ。」
ティシアもトュレイマンも自己紹介した。

「仕事？何の仕事ですか？」
「守ることだな。そこにいる人を。」
ティシアが首を傾げながらトュレイマンに聞くと
トュレイマンがベットに倒れている人を指しながら言う。

「守る？私の母と父を？もう死んでいるじゃないですか？」
「ああ死んでいるな。相当なやり手だな。殺した奴。
部屋の前に一人、兵士がいたのに気づかないなんてな。」
ティシアが怒り混ざった声でトュレイマンに聞くとトュレイマンは扉の向こうを見ながら言う。
扉の向こうには一人の兵士が倒れている。トュレイマンが殺してしまった兵士だ。

「トュレイマンさん、あなたは何者なんですか！？」
「俺は僅かな光の一人だ。」
ティシアが大きい声で言うとトュレイマンは耳を塞ぎながら言う。

「僅かな光？確か、悪い貴族を暗殺する義賊でしたよね？」
「ああ、そうだ。先日、僅かな光に一通の依頼が来た。この城の主の命を狙う者がいる。

そいつから、この城の主を守ってくれと。」
ティシアが確認しながらトュレイマンに聞くと、トュレイマンが手短に自分の仕事を話す。

話し終わった後にドアの向こうからドタバタと足音が聞こえてくる。
「おいおい、もう来てしまったのかよ。」
「兵士がですか？あなたは一人の兵士を殺しましたからね。」
トュレイマンがドアの向こうを見ながら言い、
ティシアがドアのドアの向こうに倒れている兵士を見ながら言う。

「さて、と。」
トュレイマンが腰に付けている鞘から剣を抜く。

そしてその剣を
「いったい何を？」
ティシアに向けていた。

「俺はここであんたに仕事しているのを見られた。
俺は自分の仕事の話したつもりだが、たぶんあんたは信じてないだろうな。
そしてあんたがこの事を兵士に言うと、俺がお尋ね者になってしまう。
そんな事を塞ぐために、口封じしておかないといけない。」
「そんな私、信じています。トュレイマンの事。」
トュレイマンがティシアに剣を向けながら言うと、ティシアが涙目になりながら言う。

「んじゃあんたに選ばせよう。この選択肢によってあんたの運命が決まる。」
「分かりました。」

トュレイマンがティシアの顔を窺いながら言い、ティシアが首を下に振りながら言う。

「生きて地獄、見るか？死んで天国、見るか？」
トュレイマンが厳しい声で言う。ティシアは少し考える。

「私、父と母の仇を取りたいです！」
「なら俺と一緒に来い！」
ティシアは自信のある顔で言い、トュレイマンが笑顔で言う。

しばらく二人は見つめあっていた。トュレイマンが突然動いた。

「おっと、ゆっくりしている暇は無かったな。ティシア、走れるか？」
「はい、走れます！」
とトュレイマンがティシアに確認すると、ティシアが気合の入った声で言う。
トュレイマンがその言葉を聞くと走り出した。ティシアも追いつこうと走る。

城の廊下は暗く前が見にくかった。しかしその中に一つ光がトュレイマンが向かって来る。

「待てーい。殺し屋！」
「この声は・・・ガドル！？」
渋い声が聞こえて、ティシアが驚いた顔で言う。
光が近づいて来て声の主を確認すると、
鼠色の鎧を着ており、兜から顔が見ていた。顔に長い白い髭が生えていた。
槍を持ちトュレイマンに向けている。

「姫様！貴様！殺しをしておいて誘拐もするつもりか！許せん！
このサドル城騎士団隊長ガドルが自ら制裁をしてやるわ！」
「うるさい爺さんだな。年なんだから大人しくしておけよ。」
ガドルと言われている爺さんは大きく怒りの混ざった声でトュレイマンを睨みつける。
トュレイマンは耳を塞いでおり、呆れたような顔でガドルを挑発する。

「貴様！言わせておけば！もう我慢の限界だ！」
とガドルが言うとトュレイマンに向かって槍を向け走ってきた。

「お、やる気か爺さん？ならこっちも容赦なくやらしてもらうぜ！」
「トュレイマンさん、殺しはいけませんよ。」
「はいはい。」
トュレイマンがガドルを見て腰に付けている鞘から剣を抜く。
ティシアが大きい声で言うと、トュレイマンが分かっていたかのように返事する。

トュレイマンは突っ込んできたガドルを避け剣の持つ部分でガドルを殴ろうとするが、
「無駄だ若者！わしはそんな攻撃喰らわんぞ！」
と言ってガドルは避ける。

トュレイマンは殴りに体重を懸けていたようで体のバランスを崩した。
「ここで終わりだ！若者よ！」
とガドルが槍で突いてこようとする。その瞬間ティシアは目を瞑る。
「ち、あんまり使いたくなかったんだけどな。」

トュレイマンが小声で言う。

「瞬動！」

とトュレイマンが言うと一瞬でガドルの後ろについた。

もちろんガドルの槍の突きは外れた。

「なんじゃと！」

「しばらく寝てな！じいさん！」

ガドルが驚いている隙に剣の持つ部分でガドルの首の後ろを殴る。

殴りは当たり

「く、くそ。」

とガドルが悔しそうに言うと、ガドルは倒れた。

「ガドル！？」

とティシアが驚きの声を上げると、

「大丈夫、気絶させただけだ。」

「トュレイマンさん今のは？」

「説明している暇はないみたいだぜ。」

トュレイマンが後ろを見て言う。暗闇の中に無数の光が動いていた。

「あれだけの相手は勘弁だ。逃げるぞ！」

とトュレイマンが言い、走り出すとティシアも走り出した。

しばらく走り、

「出口が見えてきた！」

とトュレイマンが声を上げると、

「ここから先は通しません！」

と二人の兵士が出口で待ち構えていた。

「ちっ面倒だ！」
トュレイマンがいきなりティシアをお姫様抱っこしたのだ。
「何を！？」
「跳高！」
ティシアが驚いた顔で言うと、トュレイマンが叫んだ。
その瞬間、トュレイマンは高く飛び、二人の兵士を抜いてしまった。
二人の兵士は驚いた顔していた。

「このまま脱出するぞ！」
「降ろしてくださいよ。」
「あんたに気使ってる余裕はないんだ。」
ティシアが怒った顔で言うとトュレイマンが冷静に言う。

そして城の外に出て、しばらく走っていると
白いものが見えてきた。
「あれは何ですか？」

第二話「城と言う名の仕事場からの脱出」（後書き）

第二話終わりましたね。
まだまだ読者様には？な部分が多いと思いますが、
これからの話で分かると思います。
それでは人物紹介を
ティシア・メルス
性別・女
２０歳
身長１６０ｃｍ
ガドル城の王の娘。正義感のある子である。
喜怒哀楽が激しい性格。
好きなものは人助け。嫌いなもの冷たい人。

第三話「僅かな光本部って言うけど俺にとっては大事な家」

ティシアが指差す方向には白い物体が置いてある。
タイヤが四個付いており、前にドアがあり、ドアには窓がついている。
後ろの部分は荷台になっている。
いきなりドアの窓が開き、

「随分、おそ・・・うわっ。誰だそいつ。」
と男が顔を出してきた。金髪でツンツンの髪をしている。

「こいつは土産だ。」
とトュレイマンがわざとらしく言うとティシアが
「土産ってなんですか？」
と怒りながらいった。

「もしかしてお前・・・失敗か。」
「ああ、相手がやり手だった。」
金髪の男は溜息をついた。

「詳しい事は後で聞く。」
と男が言うと、窓がしまった。

「後ろに乗りな。」
「分かりました。」
二人は白いもの荷台に乗った。
しばらくすると白いものが動きだした。

「きゃあ。」

とティシアが悲鳴を上げた。

「確かにこれに初めて乗った時は俺も驚いたからな。」
「今、疑問がたくさんあるんですけど。」
「答えられるだけ答えてやるよ。」
とトュレイマンが言った。

「この白いもの、何なんですか？」
「ああ、このマシンは軽虎と言う。僅かな光、独自のマシンさ。
最高速度５０ｋｍは出る。」
「５０ｋｍ！？速いですね。」
「そうだな。」

「それでは次の疑問に行きますね。
トュレイマンが使っていた瞬動！とか跳高！って何ですか？」
「さすが姫さん。剣の流派の事も知らないのか。説明すると長いから面倒だな。」
「ちゃんと教えてください！」
ティシアが怒りながら言う。

「分かったよ。剣にはいろんな流派って言うのがあってな。流派によって色々違うんだ。
流派によっていろんな技がある。俺は斬鉄流だけどな。」
「まだイマイチ分かりません。」
「あんた、剣、使わないから覚えなくていいだろ。」

「そうですね。そしてこの軽虎に乗っている金髪の人、誰なんですか？」
「レンデスの事か？あいつも僅かな光の一員だ。
俺と同じ時期に入った。相棒って所かな。」

「そうなんですか。」

「もう一つあるんですけど・・・」

「何だ？」

「僅かな光ってなんですか？」

「簡単に言えば殺し屋。」

「殺し屋！？」

「ああ。でも殺すのは貴族だけだ。」

「どうして貴族だけなんですか？」

「腐った貴族の力で民は苦しめられている。

あいつらは自分だけ良い思いができるように民に重税をかけたり、

労働強いたり、だ。

そんな貴族を殺したい、そんな思いが集まってできたのが僅かな光

だ。」

「そうなんですか。でも今日は、守りに来たって・・・」

「そういう場合もあるって事さ。良い政治をしている貴族もいる。

でもな、そういう事を妬む屑が良い貴族を殺そうとしていることも

あるわけだ。

それを防ぐためにも、護衛にも当たるってわけだ。」

「分かりました。丁寧に教えてくれてありがとうございます。」

とティシアは礼をした。

「見えてきたぞ。僅かな光本部。」

見えたのは大きな城だった。

「大きいけど私の城よりは小さいかな。」

「しょうがねえだろ。山の中なんだから。」

ドアからレンデスが出てきた。

「さて説明してもらおうか。」

レンデスが凄い剣幕にトュレイマンに近づいていった。
「ボスに話すからついでに聞いといてくれよ。」
トュレイマンがレンデスを見ながら言う。
「ついてきな。」
トュレイマンがティシアを見ながら言う。
ティシアが連れていかれたのは王座のある部屋だった。
玉座には人が座っていた。
男はちょんまげであり、黒の着物を着ていた。
「ボス、今、帰還いたしました。」
レンデスが敬礼をしながら言う。
「見たことのない顔面がいるがどういう事だ。」
「それについては・・・」
トュレイマンは今まであった事、全て説明した。
「そんな事があったのか。」
レンデスは深刻そうな顔をしながら言う。
「ほう、面白そうじゃな。よし、手伝って差し上げよう。」
ボスがどこからか出してきた扇子で自分の顔を扇ぎながら言う。
「ありがとうございます。」
とティシアが礼をしながら言う。
「しかし、この場所に居るからには仕事をしてもらないとならんな。
」

「その件についてはこの男の監視をさせてどうでしょうか。」
レンデスがトュレイマンを指で指しながら言う。

「この件と言い、このトュレイマンは問題ばかりを起こします。
だからこの女が監視していればトュレイマンの行動は問題なくなるかと。」
「ほう、良い案じゃ。そうしよう。トュレイマン、良いだろうな？」
「はいはい。分かりました。」
トュレイマンが面倒くさそうに言う。それを見たレンデスは溜息をついている。

「今日はもう寝ると良い。明日、依頼を受けさせる。」
とボスがトュレイマンを見ながら言う。

「そういう事だティシア、行くぞ。」
「どこに？」
「俺の部屋だよ。」
トュレイマンが歩き出すと
「待ってよ。」
とティシアが歩き出した。

歩いているいる途中
「そういえば自己紹介がまだでした。
レンデス・ミルーシェと言います。」
「あ、どうも。私はティシア・メルスと言います。よろしくお願いします。」
二人が自己紹介をしていた。

「それでは。部屋が向こうなので。」
とレンデスは一礼していった。

ティシアがトュレイマンを追って入った部屋は汚かった。
大きい窓があり、ベットが一つあった。剣などが壁に飾られていた。
「なんですか！この部屋は！」
「必要な事がすぐにできるようにしてある。それだけだ。」
トュレイマンが寝ている？と思われるベットが中心に物が配置されていた。

「私の寝る所がないじゃない。」
「俺のベットで寝ればいいじゃねえか。俺はイスで寝る。」
「そんな事したら、トュレイマンに悪いじゃない。」
「構わない。だいたいお姫さんがベット以外で寝れるのか？」
「そ、それは・・・」
「決定。それではおやすみさせてもらうよ。」

とトュレイマンが帽子を下げて顔を隠した。
「で、でも。」
ティシアが言ったが、返事は無かった。
「ね、寝息も聞こえない。」
とティシアが驚いた。
ティシアが少し抵抗を持ちながらベットに入った。

ティシアは目を覚ました。眩しい日差しがあった。
ティシアはふとイスの方を見る。トュレイマンの姿はなかった。
外から大きな声が聞こえてくる。トュレイマンの声だった。
ティシアは外に出て行った。

「ちっ瞬動！」
とトュレイマンが言うと

「そんな技で不意を衝こうというのか。」
とレンデスがすぐに後ろを向き剣を受け止めていた。
「レンデスも剣使いだったんだ。でも今、持っているのは木刀です。」
ティシアが興味深そうに見ていた。
「相変わらずやるな。」
「当たり前だ。お前にに退けを取るわけはいけない。」
トュレイマンが必死に剣を押しながら言う。
レンデスが普通に言った。
二人は距離を取った。
「新技を考えたんだが使わさせもらうよ。」
とレンデスがそう言うと剣を構えた。
「いいぞ、と言ってねぇぞ。」
とトュレイマンは言っているが、防御の体制に入った。
そしてレンデスが走り出した。レンデスはトュレイマンを斬ろうとした。
トュレイマンは剣で塞いだ。しかし
「確かに当たったはずだ。まさか・・・」
「そのまさかだよ。」
とレンデスが言い、トュレイマンの腰を斬った。
「ぐはっ。」
と言いトュレイマンが倒れた。
「痛てーな。少しは手加減しろよ。それで今のはどういうカラクリ

なんだ？」
「幻鏡斬、とでも言うかな。相手の前に見えない鏡を作り、相手に幻を見せる技だ。」
とレンデスが息を切らせながら言う。
「その見えない鏡は自分の体を見えなくするのか？
普通に考えたらお前が写る訳ないしな。」
「そうだ。」
とレンデスが短く返事した。

「トュレイマンー。」
とティシアが走ってくる。トュレイマンの近くに来た
「大丈夫？」
とティシアがトュレイマンに聞く。
「問題ない。」
とトュレイマンが言うが

「嘘はいけません。」
「ばれてたか。」
そしてティシアが腰を見ると

「腫れてますね。待ってて。」
「こんなの放っておけば・・・」
とティシアがトュレイマンに腰に手を置くとティシアの手が光った。

「！？」
レンデスが驚いていた。

「痛みがなくなった。どういう事か説明してもらえるか？」
トュレイマンがティシアの顔を見ながら言う。

「えーとこれはね・・・」

第三話「僅かな光本部って言うけど俺にとっては大事な家」（後書き）

人物の紹介と技の解説をします。
レンデス・ミルーシェ
性別・男
２３歳
身長１６７ｃｍ
トュレイマン唯一の友達。真面目な性格だが口が悪い。
トュレイマンと同じ剣使いだが我流である。
ボス
僅かな光のボス。男だと言う以外何も分からない謎の人物である。
技の解説
技名〔読み方〕流派
解説
瞬動〔しゅんどう〕斬鉄流
一瞬で動く技。敵の後ろに回るなど、斬鉄流の基本の技。
跳高〔ちょうこう〕斬鉄流
高く跳ぶ技。
幻鏡斬〔げんきょうざん〕我流
レンデスのオリジナルの技。
敵の前に見えない鏡を作り出し、敵に幻を見せ、背後から斬る技。
なお自分の作り出した鏡は敵の体を無視し、自分だけ写る。

第四話「治す力か、便利だな。」

「私、人の傷を治す事ができるんです。」
とティシアが説明している。

「ひ、人の傷を治す！？」
レンデスが驚いている。どうやらよほど驚いたようだ。

「人の傷を治せるか。面白いな。ははは」
トュレイマンが笑いながら言う。

「笑い事じゃないだろう！」
レンデスがトュレイマンに向かって大声で言う。

「声がでけえよ。」
とトュレイマンが耳を塞ぎながら言う。
レンデスが一息つくと
「何故、そんな事ができるんですか？」
「分からないんです。ある時、私のせいである兵士が大怪我をしまして。
いまは騎士団長をしてますけどね。」
とティシアがトュレイマンの方を笑顔で見ながら言う。

「あの頑固爺さんか。」

「それでその時に私は必死に治ってほしいと願っていました。
そしたら手が青く光って、傷が治っていたんです。すぐに私は母に話しました。」
ティシアが説明をしている。

レンデスは真剣に、トュレイマンはあくびをかきながら聞いている。
「それでなんと言ったのですか？」
レンデスが聞いた。
「神様をあなたを見て治してくれたのでしょう。
これからも神様に感謝しながら生きるのですよ。と言ってくれました。
私はそれからまた人の傷を治すことができました。私、神様に見られているでしょうか。」
とティシアが傷を治すことを説明した。
さっきまであくびをかいていたトュレイマンがいきなり口を開いた。
「神様、なんているわけねぇ。いたらあの腐った貴族共なんているわけねぇ。
優しい神様がご丁寧に殺してくれているだろうな。」
トュレイマンがわざとらしく神様のところに間を置いて言った。
「トュレイマン！」
とレンデスが怒鳴った。
トュレイマンは怒鳴られる事が分かっていたのか、驚いていなかった。
「いいんですレンデスさん。私だってそうは思っていません。」
ティシアがレンデスの怒りを静めるように言う。レンデスはすぐ落ち着いた。
「まっ傷を治してくれるだったら助かるけどな。」
「もちろんです。尽くせるだけは尽くします。」
トュレイマンが少し嬉しそうに言うと、ティシアが笑顔で答える。

そこに人が歩いてきた。
メガネをかけており、黒い中華服のような服を着ており、短髪の男だった。
「無駄な会話の時間はやめていただきたい。」
「お前は・・・ルコラスか。」
トュレイマンがルコラスと言う男を睨んでいる。
トュレイマンにとってあまり印象の良い人間ではないようだ。

「そちら方は誰ですが？」
「この人はティシアさんだ。シュシコア国サドル領を治めている者の娘ですが。」
ルコラスがティシアを指しながらレンデスに聞く。レンデスはティシアの説明をした。

「ほう、なかなか良い身分な人ですね。この方は嫌なかたではないのですか？」
「てめぇ・・・」
トュレイマンが剣を構えながら言う。

「僕はそんなどうでもいい事を聞きに来たのではないです。
ボスがお呼びですよ、トュレイマン、ティシア、レンデス。」
「そうか・・・用件は言ったんだとっと消えな。」
トュレイマンが冷たく言い放つと、

「ではご希望通り、この場を離れさせてもらいます。
あなた達のような方と話している暇もありませんからね。」
ルコラスがそう言うと、歩いていった。

「相変わらずむかつく野郎だ。」

とトュレイマンが歩いているルコラスを見ながら言う。
「今の方はいったい？」
「彼はルコラス・ワイールです。僅かな光で一番仕事の成功率が高い者です。
常に近道を考え、行動をしています。
しかし、近道のために仲間を見捨てたり、罪の無い人間を殺したり、あまり行動は良くありません。」
ティシアがレンデスに聞くと、レンデスが丁寧に説明した。
「あまり良いとは思えない方ですね。」
「あんな奴は僅かな光にはいらねぇ。」
ティシアが言うとトュレイマンがすこし怒り口調で言った。
「さてボスのところに行くか。」
とトュレイマンが区切りをつけるように言った。

「来たか。」
ボスがトュレイマン達を見ると言った。
しかしボス以外に見知らぬ男が立っていた。
大剣をクロスさせるように二つ腰にかけている。
「久しぶりだなトュレイマン、レンデス。」
「グールス！」
トュレイマンとレンデスが同時に声を上げた。
大剣を背負った男が振り向いた。
つんつんの髪型、神官のような赤い服、純粋な赤色のマント。
「久しぶりだな。」
「本部に戻ってくるのか？」

トュレイマンがグールスという男に聞く。
その瞬間ティシアが
「本部？」
レンデスに聞いた。ティシアはトュレイマンに聞こうという考えはないようだ。

「僅かな光には本部と支部があるんです。
本部だけだと遠くの仕事がつらくなりますから。」
とレンデスが真面目に答えた。

「いや帰ってきただけだ。」
「そうなんですか・・・」
レンデスが悲しそうな顔をする。

「それでなんで戻ってきたんだ？」
「それが本題だ。最近、イント領で労働が強いられているらしい。住民から訴えがあった。
以上だ。」
「イント領・・・」
ティシアが俯きながら言う。

「そこで調査をしてほしい。こちらも忙しいのだ。」
「支部が？何かあるのか？」
「何か大きなことが起きそうなのだ。それについて調べている。」
「それで手が回らないから俺達にか、」
「そういう事だ。」
トュレイマンとグールスが話し合っている。

「そこでトュレイマン、お前に調べてもらいたい。」

グールスが真剣な顔で言う。

「グールスの頼みなら断れねぇな。」

「調査といってもお前の判断しだいでは殺してもいい。」

「殺す！」

ティシアが大きな声を上げていた。

黙っていたボスがティシアに聞いた。

「さきほどからうるさいぞ。」

「すいません。しかしイント領に限ってそんな事は・・・」

「そこの女性の方、私は嘘をついてはいない。」

グールスがティシアを見ながら言う。ティシアは不安げな顔を見せた。

「僕はどうすればいいのですか？」

「レンデス・・・あなたには別の仕事をしていただきます。」

「では私はこれで。」

と言うとグールスが歩いて行った。トュレイマンがそれに気づくと

「また来いよ。」

とグールスに声を掛けた。グールスは聞こえていた。

「生きてまた会おう。お前が死ぬとは思わんが。」

とグールスが言うと、グールスは走って行ってしまった。

「さてトュレイマン。明日にはイント領に行ってもらう。」

「了解。グールスの頼みだからな。」

とトュレイマンが快く承諾した。ティシアはまだ信じられないようだ。

第四話「治す力か、便利だな。」（後書き）

キャラ紹介をします。
ルコラス・ワイール
性別・男
２５歳
身長１６７ｃｍ
僅かな光の一人。
僅かな光では最も仕事の成功率が高いが
常に早く終わらせることを考えている。
そのため仲間を見捨てたり、罪も無き人を殺してしまう。
そんな事が多いため、周りからは良い人間とは思われていない。
何事も最短な方法で済ませなければ気がすまない性格。
短剣と剣の扱いを得意としている。
グールス・デレラス
僅かな光の一人。少し前に支部長に昇格したばかりだ。・
トュレイマン、レンデスとも仕事をした事をある。
常に人の事を考えており、
人よりも自分が犠牲になる方のが良いと思っている。
ルコラスに仕事の成功率は劣るが、仲間を大切にしている。
そのため、支部長になれた。
大剣の二刀流と異例な戦い方で戦う。

第五話「なにか嫌な予感がするぜ」

「ここがイント領か。雰囲気が暗いな。」
「そうですね・・・」
トュレイマンとティシアはイント領に来ていた。
トュレイマンの言うとおりに街の雰囲気が暗かった。

人は暗い顔をしており、地べたに座っており
「助けてくれ・・・」「もういやだ・・・」
と聞きたくはないような言葉が聞こえてくる。

トュレイマンがティシアを見て
「そろそろ元気に出してくれねぇか？」
「無理です・・・」
ティシアが顔を俯けながら答える。

「何でだよ？」
とトュレイマンが聞くと、ティシアが一息つき

「イント領はサドル領と条約を結んでいるんです。お互いに助け合おうって。なのに
何の相談もなしにこんなことをしています。サドル領は信頼されてないんですよ・・・」
とティシアが説明した。それ見てトュレイマンは呆れた顔をして

「考えすぎだろ。」
と言った。

「まぁとりあえず住民に話しでも聞いてみるか。」

トュレイマンは地べたに座っている住民の前に行った。
住民は俯いている。
「ひいいもう少し待ってください。あと少し、あと少しです。」
住民は震えている。
「何言ってんだあんた。何かと勘違いしてないか？」
と住民が顔をあげてトュレイマンを見ると震えが止まった。
「取立てじゃないのですか。良かった。あなたは一体・・・？」
「僅かな光って知ってるか？」
「僅かな光！？」
住民は大きな声を上げた。
「声が大きいぜ。」
とトュレイマンが言った。周りの住民がトュレイマンを見ている。
「ついに動き出したんですね。依頼を出したかいがあった。」
「なんだ、あんたが依頼した人か。」
「そんで何が起きているんだ？」
「ある日、突然、税が重くなったんです。私達には払うのは到底無理な額です。」
「ある日、ねぇ。」
とトュレイマンがわざとらしく間を置いて言った。何か、考えているようだ。
今までだまっていたティシアが
「払わなかったらどうなるんですか？」
と恐る恐る聞いた。

「城に連れてかれるのです。帰ってきた者は一人も・・・」
「そうですか。」
とティシアが暗い顔をした。

「あ・・あ・・・れは・・・・」
と住民は怯えている。住民が見ている方向を見ると兵士がいたのだ。
こっちを見るとこっちに来た。

「旅の者か、何のようだ？」
と兵士が冷静に聞いてきた。トュレイマンは普通にしている。

「別に・・・んにしてもこの街は雰囲気が暗いな。笑う門に福来る、だぜ。
あんまり暗いと僅かな光と言う名をした不幸が来るぜ。」

「！！」
兵士が驚いている。

「貴様、何者だ！」
兵士が怖い顔をしてトュレイマンに聞いた。しかしトュレイマンはまったく動じない。

しばらくトュレイマンは黙っていた。
「僅かな光を持ってきた者さ。」
とトュレイマンが冷静に答えると兵士が槍を構え

「死ねぇ！」
とトュレイマンを突こうとしてきた。トュレイマンは軽々しく避ける。

「そんなにあの世の風景が見たいのか。ではお望みどおりに見せてやるよ。」
トュレイマンがそう言うと剣を出し、兵士を斬ろうとしたが

「殺しはいけません！」
とティシアが叫んだ。

それが聞こえたのかトュレイマンはチッと舌打ちをし、剣をしまった。
「帰りな。城に。」
トュレイマンが兵士を見ながら言った。睨んでいる。

「わ、分かった。」
兵士がそう言うと走って行ってしまった。

「さてこれからどうしようかな？」
とトュレイマンがふざけた顔で言った。わざとらしく。

「夜に潜入する、というのがいいんじゃない？」
ティシアがトュレイマンに提案した。

「そうするか。すまねぇが夜までここに居ていいか？」
「どうぞ中に入ってください。」

二人は住民の家の中にいた。
トュレイマンはイスに座り、ティシアもイスに座っていた。

「トュレイマンが読書なんて柄に合いませんね。」
「これはただの本じゃない。奥義書だ。」

「おうぎしょ？」
「奥義書って言うのは・・・説明した方がいいのか？」
ティシアが頷いた。

「奥義書って言うのはな、技の出し方が載っている本だ。」
「技？」
「瞬動！跳高！って言うやつさ。」
「ああ。」
「剣には流派って言うのがあるのは教えたよな。
流派によっていろんな技がある。その技が載っているのがこの本だ。
」
「なるほど。」
「俺が読んでいるのは斬鉄流の奥義書だ。」
「そうなんですか。」

そして夜になった。さすがに夜とあって暗い。
「静かですね。」
「さて潜入と行くか。」
二人は城に向かって歩きだした。

「さてどう潜入するかな？」
とトュレイマンが言っている。

トュレイマンが言うとおり潜入が難しくなっている。
城の周りに囲いがあり、入り口は一つしかない。入り口は正門へと
続いており、
正門には兵士が立っている。

「そうですね。あまり人には見つかりたくないものです。」
ティシアが兵士を見ながら言った。

「囲い・・か。」
とトュレイマンが囲いを見ていった。

トュレイマンがいきなりティシアがお姫様だっこした。
「な、何をするんですか！？」
「こうするんだよ！跳高！」
とトュレイマンが言うと高く飛んだ。

トュレイマンとティシアは囲いの上に着いた。
「しゃがんで歩けよ。」
「分かりました。」

囲いの壁は低く、普通に歩いているとばれてしまう。
しばらく歩いていると、囲いと城が接している場所に着いた。
「この窓から潜入できそうだ。鍵もかかってねぇし。」

トュレイマンが窓を静かに開けた。
トュレイマンとティシアは城の潜入に成功した。

第五話「なにか嫌な予感がするぜ」（後書き）

奥義書の説明をします。
トュレイマンの言うとおり、流派によっていろんな技があり、
その技をが載っているのが奥義書です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8513h/

Dark In Light

2010年10月14日12時05分発行